

20161111 みやぎ地域復興ミーティング

パネルディスカッション「コミュニティ再生の姿とその担い手たち」



●パネリスト

鹿折まちづくり協議会	事務局	丹澤 千草 氏
つながりデザインセンター・あすと長町	代表	飯塚 正広 氏
野田北ふるさとネット・野田北部まちづくり協議会	事務局長	河合 節二 氏
公益財団法人トヨタ財団	チーフプログラムオフィサー	本多 史朗 氏

●コーディネーター

つながりデザインセンター・あすと長町 理事・事務局長 宮本 愛 氏

宮本：それでは、パネルディスカッションへ入っていききたいと思います。本日、パネルディスカッションのコーディネーターを務めます、宮本愛と申します。最初に、パネラーとして加わっていただく本多さんのご紹介をさせていただきます。本多さんは、公益財団法人トヨタ財団でチーフプログラムオフィサーを務めていらっしゃいます。在フィリピン日本大使館専門調査官として国際交流の提言づくりに携わった後、トヨタ財団では、ミャンマーなどで草の根古文書保全の枠組みづくりに従事。現在は同財団の「復興公営住宅におけるコミュニティづくり」プログラムを担当され、被

災各地のコミュニティ形成支援にあたられています。今日は、現場に根差した一つ一つの取組を、マクロな視点からどのように位置づけ、評価するか、被災地全体を俯瞰する立場から、いろいろと発言をお願いできればと思っております。

○登壇団体地域概要

宮本：まず、議論に入る前に少し、各地区の特徴をふりかえっていききたいと思います。皆さまの配布資料の中に、「登壇団体地域概要」の資料が入っていると思います。今日は3つの地域の活動をご紹介します。

はじめに気仙沼市の鹿折地区のご報告でした。鹿折地区は被災した地域をかさ上げる土地区画整備事業を行っていて、そこに新市街地を整備しています。その周辺には従前からの地域が残っている、という場所になっています。赤いところが区画整理地域で、その周辺に防災集団移転地なども含まれていて、全体で約 2,600 世帯。関わっている団体としては鹿折まちづくり協議会で、鹿折地区の全 24 行政区で構成されており、多くの既存地域と連携しながら活動されているという特徴があったかと思います。

2 番目にお話しいただいた仙台市あすと長町地区は、開発が進む副都心に、点的に建設された災害公営住宅という場所で、あすと長町地区自体が被災したわけではないんですね。ご存知の方も多いと思いますがイケアなど新しい大きな商業施設やマンションの建設が進んでいる、まさに副都心になっている場所です。そこに、ポツンポツンと災害公営住宅が建設されたという場所です。活動の対象とされているのは、災害公営住宅の入居者、活動団体としては、災害公営住宅それぞれの自治組織と、つながりデザインセンター・あすと長町という NPO といった体制になっています。

3 番目が、神戸市長田区野田北部地区のお話でした。これは、路地や長屋で構成されていた被災市街地が、地震で倒壊して、そこと同じ場所を土地区画整理・地区計画によって再建・整備したという場所になっています。対象とされている人口は約 940 世帯、活動団体は野田北部まちづくり協議会、震災後に設立された野田北ふるさとネットで、活動を継続されているということです。

各地区の特徴を念頭におきながら、これからの話を聞いていただければと思います。

みなさんに、休憩時間の間に質問カードを記入していただきましたが、その中で最初に確認して

おきたいものが一つありました。飯塚さんへのご質問になります。「復興公営住宅のペット可以外の 2 棟の抽選は、どのようにして行われたのですか？仮住まいの場所や震災以前の住居の考慮はあったかどうか」というご質問です。二つ目は、「IT の見守り安心システムは単身世帯全部で活用しているのでしょうか？その費用はどこから出ているのでしょうか？」というご質問でした。飯塚さん、お願いします。

飯塚：仙台市は、災害危険区域の方が優先入居したという点がありまして、この方たちは、第一希望で全ての世帯が入居しております。次に優先順位として、障がいをもった方、ひとり親の方の世帯が優先的に入居しております。それと同時に、コミュニティ入居枠ということで、5 世帯以上がまとまって応募すると、優先的に抽選をせずに入居できるという仕組みがありました。私たちは、コミュニティ入居枠を使って、60 世帯の方たちを優先入居を実現させました。このような制度が仙台市にあったということです。あとは一般抽選枠が設けられていました。

IT の見守りですが、これは東北学院大学さんと連携をして、3 年間実証実験を行いました。現在は、新たなバージョンを開発中でして、1 年ほどお休み期間をいただいています。単身高齢者 65 歳くらいから、最高は 88 歳のおばあちゃんまでの 30 世帯くらいの方にお使いいただいています。費用は、すべて東北学院大学さんの研究費となっています。

宮本：ありがとうございました。

○東日本大震災における

コミュニティ再生の全体観

宮本：それでは、本日のテーマの「コミュニティ再生の姿とその担い手たち」についての議論に入

っていきたいと思います。まずはじめに、本多さんに口火を切っていただきたいと思います。東日本大震災被災地の全体を見回した時に、コミュニティ再生の状況をどのように感じられているか、どういった点が課題か、そして今日ご紹介のあった仙台市あすと長町地区、気仙沼市鹿折地区の2つの事例が被災地域の中でどのような位置づけにあるか、といったところを、少しお話だけいただけますでしょうか。

本多：トヨタ財団の本多と申します。どうぞよろしくお願いたします。今ですね、大変難しい問いをいただきましたが、私は東日本大震災の被災各地をあちこち回ってみて、それから今日の県内2地区のお話を聞いてはっきり感じることは、復興・コミュニティづくりの担い手というのが、自治会、復興公営住宅の入居者など、土地の人たちへ移ってきたということです。トヨタ財団でも、そうした人たちを今後支援していこうと思っています。みやぎ連携復興センターの石塚さんなどもご記憶だと思いますけれど、3年前や5年前にこうした会を開くと、おそらく参加者の平均年齢は20~30歳くらい若かったのではと思いますね。時間の経過と共にみなさんお年を召された方が増えてきた。これは全然悪いことではなくて、やっぱり地場にいる紳士淑女の方々が、コミュニティづくりをやるようになってきた、そういうことだと思います。そういった人たちの力をどうやって引き出すかというのが、NPOや社会福祉協議会のLSAの方であるとかに求められるステージに入ってきたと思います。これはあすと長町さんのお話でも、鹿折地区のお話でも、やっぱり完全に土地の人たちがコミュニティづくりの担い手になってきた、という状況だと思います。これがまず1点目です。

それから2点目として、私が3県を見てみて、

宮城県は非常に特別なポジションにある。というのは、仙台市は政令指定都市でミュンヘンとかフランクフルトとかそういう都市に匹敵している。完全にグローバルな経済の仕組みができています。世界でも先端的な都市という顔の一つ持っていると思います。もう一つ逆に沿岸部、南三陸などの地域に参りますと、ここにいらっしゃる東北学院大学の本間先生や、宮城県サポートセンター支援事務所の鈴木さんらが調査されていますが、講中とか、契約講と呼ばれる神社やお寺の檀家・氏子の集団が、コミュニティの一つの単位になっている。非常に小さな世界が無数にある。しかもその中でお金はあんまり動かず、基本的には自給的な世界である。そういう二つの顔を宮城県はお持ちだと感じます。そしてその中間にあるのが、東松島市であるとか、石巻市だと思います。石巻市でも仙台に近い側・石巻駅周辺側と、半島部でまったく異なる顔が見えてくると思います。ですから、統一の、まったく同じやり方でコミュニティづくりをやろうと、あまりお考えにならない方がよいと思います。はっきり言えば、仙台市で支援する場合ですと、たとえばあすと長町では、助成金などを活用してかなりの成果を早いスピードで出している。一方で、沿岸部の講中や契約講では、非常に狭い、しかも数世代にわたって人が動いていないような世界、これはお金の世界ではありません。もう少しじわじわとコミュニティを再建していく。具体的には、適切な人をつかまえてその人を中心にコミュニティづくりをやっていく、お祭りをやる。それから復興公営住宅の花壇などを整備していく。そういうやり方にならざるを得ないと思います。金がかからないけれど、時間がかかる。端的に述べますと行政の方は大きなリソースが動かないところにはあまり関心なさらないんですね。これはうちの財団でも同じです。大量の資金を投入してぱっと成果が出る所というのは、み

んなが関心を持ちますけれども、たいしてお金はいかからないが時間がかかるという所は、どうしても忘れられやすい。そこを何とか丁寧にフォローしていただくと、やはりこの宮城県では、自給的なところも残っている地域へのサポートも県庁の方で研究して頂ければと思います。この2点が私は今日のお三方のお話を聞いて、非常に強く思ったこととございます。

宮本：ありがとうございます。復興のまちづくりの担い手が、外から来た支援者から地元の人たちに移ってきたということ、それから宮城県の多様性について言及いただきました。非常に都市的な世界レベルの活動が行われている側面と、ローカルで共同的な側面を併せ持つ地域だというお話だったかと思います。

○コミュニティ再生のプロセス

-顔を合わせる土壌づくり・

小さなコミュニティの種まき

宮本：ひるがえって次はミクロの視点からコミュニティ再生について、コミュニティが育っていくプロセスに従ってたどってみたいと思います。

お三方のお話の中から、コミュニティ再生のプロセスについて、最初は土壌づくりや種まきの時期があり、それから、その種が芽を出していく萌芽の時期がある。そして育てて発展させていくという段階を、丁寧に積み重ねていかれているということが伺えたかと思います。

まず、土壌づくり・種まきの部分について、具体的には地域住民が顔を合わせる機会をつくるか、そういったところからスタートしたいと思います。この段階で行ったことや意識したことがありましたら、少しお話いただけますでしょうか。

丹澤：今日の報告でもお話しましたが、住民さん

が顔見知りになる一つのきっかけというのが、構成委員会合という場ができていたということです。コミュニティづくりの本当に最初の段階のことなんですけれども、やはり人集めから始まったんですね。私は以前は、いい活動をしていれば、放っておいても人は集まると思っていたんですけど、そういうことではないんですね。やはり、誰かから声をかけて、その声をかけられた人が「この人にはお世話になっているから、しょうがないから行くか」というところから始まっていくことが少しあるんですね。でも集まっていく中で、「楽しいな」というように変化していくんですが、最初は声かけの働きかけがきっかけだったと思います。

飯塚：あすと長町では、マンションタイプの復興公営住宅が全部で320世帯あるんですが、あすと長町の仮設住宅から移った方というのは、そのうちの2割から3割くらいしかいないんです。ただ私たちは、仮設住宅からの勉強会を重ねていたので、住民さんにおのずと刷り込まれていったと思うのが、挨拶だったと思います。住民さんに、積極的に、エレベーターで会ったら、「おはようございます」、「こんにちは」と声をかけ、他愛のない世間話から入っていく。本当に基本中の基本ですが、そういうところから、あすと長町の仮設住宅から移った人たちに刷り込まれていって、それが、あすと長町復興公営住宅のコミュニティをつくる一つの土壌になったのではないかなと思っています。

宮本：ありがとうございます。基本中の基本ですけど、挨拶しあえる関係をつくってそこからスタートするということですね。

○コミュニティ再生のプロセス

-芽生えを捉え、後押しする

宮本：次の段階ですが、コミュニティに関わるような活動が顔を出すか、出さないかというところに気付いて、それを引っ張りあげてきた、というのがお二人の活動だったと思います。例えば鹿折地区の夏祭りでも、最初是中々地域住民の方々がスタートに踏み切れなかったという所で、たくさん働きかけがあったようにお聞きしていますが、そのあたりをご紹介いただけますか。

丹澤：そうですね、お祭りという、みんながやりたいことでも、やはり実際に準備に自分に関わるとなると大変だということで、中々踏み切れなかったところに、こういう手段があります、こういう予算があります、こういう仕組みがあります、という情報提供と、少し見切り発車のところもありますが「やっちゃいましょう」「やれます」という後押し、声掛けは必要なのではと思います。盆踊り以外でも例えば、今度お抹茶をたてるお茶会をやるんですが、そのお茶の先生がいて、「やってみたいんだけども…」とご自分では中々行動に移しにくいんですね。でもそれをするために必要なことという、実はそんなにないんですね。チラシをつくること、2~3人に声をかけてお手伝いをお願いしたり、会場を確保したりすることなどですね。そんなに大変ではないんです。でも、新しいことをやってみるといったステップが、特に今までそんな活動をしていない方々には、結構ハードルがあるんですね。そういう所を後押ししたり、事務的にサポートしたりする機能が必要なのではないかと思いました。

宮本：ありがとうございます。これに関連して、飯塚さんには会場の方より質問をいただいています。「小さなコミュニティ、クラブ活動の立ち上げ、

継続のため、自治会は具体的にこういった支援をしていたか教えてください」。今日のお話の中で、仮設住宅でたくさんのサークル活動が立ち上がっていたというお話があったと思いますが、いかがでしょうか。

飯塚：別段そこに予算づけをしたとか、私たちが資金的な援助をしたということはなく、まずは、上から引っ張りあげる、と言ったらいいのでしょうか、「3人集まったらクラブだ」と私たちが言ってしまったんですね。何か好きな人が3人集まったらそれでクラブでいいじゃないか、ということで、勝手に私たちも「シネマクラブ」というように呼んじったんですね。それがどんどん波及して行って、植木が好きな人がいたので「緑化クラブ」、朝ラジオ体操やっている人たちがいたので「ラジオ体操クラブ」と、勝手に呼んだんですよ。その人たちが、小さいコミュニティのリーダーだよ、とした。そして一人一人呼んで来て、「何か足りないものはないですか？」と聞いて、例えば「そろそろ暑くなってきたので、ラジオ体操の時の飲み物がほしい」と言われれば、飲み物を用意したり、「ラジオが聞きづらい」という声があれば、ラジオをどこかから調達して来たり、というような形で、どちらかというと側方支援というか、支援団体さんとなつなげるようなこともやってきましたが、自発的にサークル活動が回りだすまで、ちょっとだけ背中を押してあげるということですね。それが非常に重要なところかと思っております。

丹澤：補足ですが、個人への後押しの重要性と、そういう合意を得る場を設けることもできると思います。いろんな人たち、いろんな関係団体に声をかけて集まってもらって、その場で「お祭りをやりたいんですが…」と話を誰かが持ちかけてみる。特にだれも反対をしないと、そのままになっ

てしまうんですが、なんとなく、その場のリーダーのような人が、押しの強い感じではなくても「やりましょうか」と、その場で言うてしまうと、やるということになります。勝手にやってはいけないという意識がみなさんあるんですよ。だから、何かをやるときに、「やります」と承認を得る場をつくる。そこには自治会長や、まちづくり協議会の事務局、主な地元の関連団体である老人クラブ、スポーツ振興会などが集まります。こうした関係者が集まる場をつくるのが、とても重要だと思いました。

宮本：今の飯塚さんや丹澤さんのお話に共通していたことは、やる気のある方の背中をちょっと押すということ。それから、関係者を集めて、その中で承認を取ってしまうという方法がありました。何かやってみようという方法があっても、実際にやると何かほかの人に言われるのではないか、とまっている人もいると思うんですね。そこでみんながいる場で承認を取ることができると、「みんながやるうと言っているのならやるう」というように進むこともあるのだらうと思います。

○コミュニティ再生のプロセス

-地域住民の一体感の育成

宮本：続いて、コミュニティを育てるという段階に入りますが、会場より質問をいただいております。「少しでも多くの住民に参加してもらうために、地域の会合を開くときに工夫していることがあれば教えてください」。「コミュニティの再生にあたり、再建パターンの違い（戸別再建、災害公営住宅など）、河合さんの地域では、区画整理のエリアと自己再建のエリアがあったということでしたが、再建パターンの違いによる住民の温度差はありませんでしたか。もしあれば、どのように対応されましたか」ということです。この質問については、

お三方にお聞きしてみたいと思います。

河合：区画整理のところはすぐに再建できないんですね、合意を得ないと。計画で、どのようにやっていくのかということが、ある程度まとまらないとできません。ただ、区画整理でないところというのは、お金があったらすぐに再建できるわけですね。ですからその差が出てきたというのがありますね。

ただ、区画整理のところは、インフラがまっさらに更新されるんですね。本当にニュータウンができていく。ですからその差は時間と共に、区画整理でない自己再建のところとズレが生じてくるのは仕方ないんです。ただ、幸いなことに、我々の野田北部地区の区画整理は、神戸市でいっぺんで合意を得たので、早かったんですね。ある時期は、地域全体がモデルハウスの展示場かというように、いろんな建物が出来上がってきていました。それと、区画整理が最初に道ありき、公園ありき、なので家は後から建ててくる。それ以外の地区計画のエリアでは、建物が建て替わらないかぎり道は広がらないので、真逆なんですね。そのあたりが難しいところです。地域に地震で助かったお家、ほとんど全壊でも修理させている所が混在しているんですね。普通の建築基準法で建てたお家、地区計画にのっとって立てたお家の3パターンになるんです。

宮本：ありがとうございます。飯塚さんと丹澤さんはいかがでしょうか。地域の会合に人を集めるときの工夫点と、再建の方法が異なる人たちの住民の間での温度差への対応といったところで、いかがでしょうか。

丹澤：工夫点ですが、地域活動の中では、告知で、とにかく多くの人に声をかけなくてはいけないの

で大変なんです、地元新聞に載せてもらったりします。何かやるときに、これについてはだれが勝手に決めただというようになってしまうので、公平に、これについて話すので集まってくださいというプロセスを踏む必要があるんです。みんなにちゃんと知らせるといことは、きちんとやらなくてははいけない。

あとは会議の進め方ですが、ゆるい雰囲気になるべくした方がいいということです。気軽に参加する人もいますので、そこで本気の、喧々諤々の議論をすると、結構引いてしまう人もいます。もともと気軽な感じだったら来てもいいなという人が多いので、そこは地域の人のペースにまかせて、会議を進めます。進め方は地元のリーダーがやってくれます。

再建パターンですが、一回防災集団移転の人たちの、土地引き渡し祝賀会・懇親会を鹿折まちづくり協議会主催で行いました。これは、参加したみなさんがすごく和気あいあいとしてよかったんですね。これは震災前のコミュニティがベースになって、そのコミュニティごと移転するという形であったからかもしれません。それに比べると、復興公営住宅の入居者の交流会は、盛り上がりや出席率などがかなり落ちると感じます。いろんな地域から入居者が集まっているということが影響するのだらうと思います。

飯塚：重要な会議や集会は、必ず回覧ではなく、全戸にポストイングをしています。これはなぜかという、回覧で回してしまうと、見落とす可能性があるんですね。また、回覧を見て、わざわざカレンダーに書く人って、よほど几帳面な人でないと書かないんですね。そうすると、いつ会議をやるかというのが、回覧で回してしまうと忘れてしまう。そこで私たちは、重要な会議の時は必ず全戸にポストイングするというのは基本

にしています。

再建方法の違いなんですけれども、私たちは復興公営住宅のみなので、違いはないんですけど、ここ最近でいう事例で言いますと、岩沼市の玉浦西地区の、ある公営住宅にお邪魔をした時にお話に出ていたのが、元々の集落の方たちだけでなく、その他の地域から来られた方も何人かやはり入られているんですね。そうすると、やはり外部から来た方たちの疎外感、外部から来たという後ろめたさというのが非常に強いと言われていました。「○○地区より移転してきました」というのを前面に押し出してしまうと、中々集会にも集まりづらいのかなと思うので、そういった気持ちを取り払えるような作業もやる必要があるのかと思っています。

宮本：告知のお話は、河合さんのプレゼンの中でも、「知らなかったとは言わせない」とありましたけれども、皆さん気を使われて、丁寧にされているところなんだと思います。

飯塚：あともう一つ、必ず会議をやった時の議事録もお金がかかりますけれど、全戸ポストイングで、見なかったということがないように、必ず「あなたのポストに入れましたよ」とお話しします。クレームを言われる方が必ずいらっしゃいますが、「回覧で回した」というと「見なかったよ」と言われるので、それを防止するためにも全戸ポストイングをしています。すべての議事録ではなく、ダイジェストで、A4で1枚程度、こういうことが決まりましたということを、全戸に周知することを徹底してやっています。

宮本：告知と情報発信、活動の透明化というところでしょうか。何をしているのか、みんなに見えるように進めていくということですね。再建パタ

一の違いによる温度差というのは、かなり地域によって個別性が強いので、議論が難しい課題だと感じました。

○コミュニティ再生のプロセス

-発展(担い手の育成・事務局体制)

宮本：時間も進んできましたので、次は担い手の育成について話を移していきたいと思います。中長期的に活動を持続可能にしていくということが、これから、飯塚さんや丹澤さんの地域でも大きな一つの課題になっていくと思うのですが、河合さんの地域ではそれを、阪神・淡路大震災からずっと20年以上にわたって続けて来られたということで、長く続けられてきた中での課題や、それをどのように乗り越えられてきたのかということをお話いただければと思います。

河合：当時、まちづくり協議会が動き出した時、年齢構成が20代から80代で、それだけ年齢幅が広い人間がいました。今は当時80代だった方はもうご存命ではないですし、20代は40代になっている。一つありがたいのが、当時小学生でイベントに遊びに来ていた近隣の小学生が、もう30近いんですね。これはある意味担い手になるのかなと思います。時間の経過と共に、そういう人材が育ってきている。幸いにも私も当時30代半ばで、今50代半ばになっていますから、まだもうちょっといけるやろうと、そういう気持ちで現在に至っています。また地域の方たちが、新しい方が4割くらいになっているんですね。今世帯数が1,000を超えています。人口が増えるかなと思ったんですけども、単身者が多いんですね。若いファミリー層もいますので、そういう方たちは子供を通じて、若い人たちで挨拶をして、仲良くしていればいい。

さっき飯塚さんもおっしゃいましたが、我々も

絶対全戸配布なんです。回覧なんて回しません。絶対途中で止まりますから。その時その時の情報を毎月1回発行していますから、それを見てもらえるとどんな行事予定があるのかすべてわかるように心がけています。

宮本：ありがとうございます。毎月1回を20年間続けてこられたということはすごいことですね。それから、小学生の方が30歳近くになってまた活動に加わられているというのは、世代間の継承が理想的に行われているというように感じました。

組織の体制について、まちづくり協議会の他に、野田北ふるさとネットを立ち上げられていますが、それは持続可能性の話と何か関係しているのでしょうか。

河合：結局時間とともにまちづくり計画の仕事は無くなっていくんですね。でも地域課題は残るんです。それに自治会が対応できるかということ、それも難しかったりする。もう一度、一から考えてみようということを神戸市と一緒にやったんですね。そうすると、地域の中での縦割りになっている団体組織がいっぱいあるわけですよ。それぞれ自分のことはみんなやるんですけども、よそのことは何をやっているか知らないんですね。一部メンバーは重なっているんですけども、中々連携は取れていない。それだったら一度、みんなで集まって、将来的にこの町をどうしていくんだという話し合いをやったわけです。それによって、みんな、情報を共有できる。なおかつ地域の情報は事務局に集まって来る。となると、みんな事務局に1本連絡するだけで情報が分かる。そういう場づくりというのは、良かったなと思っています。ただ町の問題というと、震災復興だけではないんですね。モラル・マナーとか、日常のどこの地域でもある話がやはりできてきます。でもそれらを解

決するにはどうしたらいいのかという課題があります。幸い、行政との仲はいいので、持ちつ持たれつ関係を続けているので、一緒に取り組んでいます。

宮本：ありがとうございます。今、野田北ふるさとネットで事務局にいるんな情報が集中してくるというお話がありましたけれども、そういう人やものが集中する事務局の存在は、とても大きいと感じます。そんな中で、会場からのご質問ですが、「一人の事務局員で大丈夫ですか？丹澤さん」というものがありました。いかがでしょうか。

丹澤：かなり大変です。すごく大変で。でも私は、お仕事として、お給料をもらってこれをやっているんだと思うと、いくらかマシになるんですけれども、こういったことを、ボランティアで住民がやるというのは、いろんな役割が住民に降りている中、本当に苦しいということは、自分が経験してみても、あるいは自治会長さんに関わってみて思います。

去年は私と、委嘱の職員 1 名に構成員会合を手伝ってもらっていたんですけども、やはり専任の職員が、給料をもらった状態で一人いないと大変だと思います。ボランティアだと、なんで自分がやらないといけないんだと思うと思います。

まちづくり協議会なので、まちづくりに関する仕事がちょうどたくさんあるという業務量の関係もあるんですけれども。まちづくりに限らず、自治の場でも、既存のしくみに甘えず、これだけの業務量が地域にはあるのだということに目を向けるべきだと思いました。

宮本：ありがとうございます。今、丹澤さんがおっしゃられたように、コミュニティ活動に自治会長や住民の立場で関わる方は、基本的にボランテ

ィアで動かれる訳ですよ。そういう方たちのスキマ時間や労力をどうやってまとめて、ものごとを進めていくのかという、「ボランティアマネジメント」という言葉もありますが、そういう重要な役割が事務局にはあるのだということだと思いません。いろいろな非営利団体を見られている本多さんは、どのように感じられますか？

本多：おそらくですね、二つ考え方があってと思います。丹澤さんみたいな、事務局としての役割を果たす方が地域外から入って来る。その人の力をいっぱい使っているものごとを動かしていく。逆にもうちょっとなんというか、素朴でいいので、地元の人たちが寄り合っているなことを考えていくというパターンもありだろうな、というように考えています。つまり、最後に外の人間というのは徐々に退場していくわけですから、おそらく今の丹澤さんのお仕事というのは突然地元の人に引き継げというのは難しいのではと思うんですね。いくつかのパーツに割ったりする必要がでてきたりと思います。そして地元の人たちの力で徐々にやっていくということが大事だと思いますね。

シン・ゴジラという映画を見ていましたら、「ないものを探すな、あるものを使え」という言葉がありまして、復興の現場でこの言葉はその通りだなと思いました。あるものを探すということ、ないものを外から持ってくるというよりも重要になると思います。特に沿岸部の割と閉じた世界の場合というのはその視点が非常に重要になると思います。

河合：事務局に専任のスタッフが一人いて、私は事務局長を務めています。その事務所には高齢者が入れ代わり立ち代わりお茶を飲みに来ます。そうすると、その人にもものを頼めるんですね。いくなればプラットフォームのような機能が事務局に

あって、日常的に動いています。

お金の問題については、我々はずっとボランティアだったわけなんですけど、神戸市から駅前駐輪場の指定管理の委託を受けていて、そこそこのお金になります。ほとんどが人件費ですけどね。地域の高齢の方をスタッフとして、有償ボランティアという形で運営しています。そうすることで、高齢者は少しおこづかいが入ってくるわけですよ。このように、自分たちで稼ぐ方法を考えていかれたらいいのかと思います。実際に僕もいくばくかもらってますけれども、おこづかいというか飲み代になるかなというぐらいです。

宮本：ありがとうございます。稼ぐ力、重要ですね。今の流れの中で、拠点についてなんですけど、河合さんにこんな質問が来ています。「野田北ふれあいセンターはだれが最初に発案したのですか？住民でしょうか、行政でしょうか？」いかがでしょうか。

河合：神戸市では、地域福祉センターを小学校区に一つつくってくれるんです。ですが、我々のところに母体となるふれあいのまちづくり協議会という、福祉系のまちづくり協議会なんですけど、それが我々の小学校区に3つあったんですね。その拠点というのは、結局役所のひも付きなんで使いにくいんですね。当時の神戸市長が、「野田北部やったらもう少し考えたほうがええやろ」ということで、民間の地域福祉センターと自治会に対する集会所助成というのを足して、建物1棟に、建設費4割強くらいの助成をしてもらいます。残りは全部地域でやっています。ただ、さきほども言いましたが自治会で登記すると法人名になってしまうので、自治会の認可団体として法人化するという形で、そうすると建物を法人名で登記できて、なおかつ固定資産税を減免してくれるんです。こ

のように行政とどうやったらできるかというのを話し合いながらやってきました。元々はまちづくり協議会の会長がそのセンターをほしかったんですね。でもなかなか実現できなかったということがあるんです。これは震災前からです。ですからそれをようやく2年半前に実現できたというのが、経緯です。

宮本：今、ふるさとネットの事務所というのはこのふれあいセンターの中にあるんですね。

続いて丹澤さんに、「地区集会所、公民館の再建時の支援は行いましたか。またそれはどのような参加者、ルートで行われ、まちづくり協議会さんの役割はどのようなものでしたか」という質問が来ております。いかがでしょうか。

丹澤：公民館はまだ再建できておりません。公民館は小学校を間借りして事務所が置かれております。まちづくり協議会の事務所があるのは、西みなと町の公会堂という地区の集会所の一部を間借りしている状態です。今後公民館の整備計画やデザインについては、きちんと住民の意見を聴いてくださいというのは申し入れしております。

宮本：あすと長町の飯塚さんは、つながりデザインセンターとしての拠点は持たずに、集会所を中心に活動されていると思いますが、ここの管理運営についてどのようになっているか、少しご紹介をお願いします。

飯塚：3つの復興公営住宅に、各々集会所がありますが、その運営と管理については各住宅ごとにある自治会、管理組合、住民の会が管理運営を行っています。外部から来た支援団体さんからは、お金を取るということで、それが水道光熱費の足しになっています。

宮本：私もあすと長町の事務局をさせていただいていますが、ふれあいセンターのような恒常的な拠点を持つというのは長期的な目標だと思います。

○行政との連携・役割分担へのヒント

宮本：続いての話題ですが、行政との連携や行政の役割についての質問がいくつかありましたので、取り上げてみたいと思います。「行政との連携について、日常的にどのように関わればよいか教えてください」、「コミュニティ形成の際、行政からの支援、財源、アドバイス、どのようなものを受けられましたか。支援の具体的な内容やタイミングを教えてください」。

これはまず、本多さんからお願いします。

本多：具体的にどのような支援を受けられたかということは、報告者の皆さんにお聞きするとして、最初のどういう関係が望ましいかということですが、私もここ数年、いろんな地域で行政との関係を見ましたが、おそらく、明日からすぐに行政の態度がガラッと変わって、突然新しいことをやるというのはあまりないというように思われた方がよろしいと思います。今までの行政との関係というのは、これからも相当な期間で続くわけですから、その中で、あまり高い期待を持たずに、しかし取れるものは取っていく、話を聞いてもらうときは聞いてもらうというアプローチが重要になってくると思います。さきほども申しましたが、沿岸部のコミュニティは、非常に自給的な性格の強いコミュニティで、これはいろんな角度から議論することができますが、彼らの強みの一つというのは、自分たちでいろんなことをやりきれ、ということだと思いますから、それを地域外から来た人たちは引き出していくという形がいいのではないかと思います。過度に行政に依存しても、明

日から行政の体質ががらっと変わるということはありませんように思います。

河合：実際に、神戸の事例なんですけど、この20年で神戸市職員が33%減っているんです。ですから行政サービスもその分落ちているということも言えるんですけど、片方で、震災復興やってきた職員が、もうほぼ半減していると思うんですね。となると、あまり期待はできないし、中身が縦割りに戻っているんですね。地域も全く一緒に、20年もたつと次世代の役員さんたちになってきていますが、そういう人たちと僕たちは合わないんですね、ズレがあるというか。時間がたっている部分もあるんですけど、そういう齟齬もある。

今のうちですよ。まだ東日本大震災からはまだ6年ちょっとですから、予算もまだ残っているはずですから、それをいかにして自分たちで使うかということ、行政と一緒に考えてもらいたいかなと思います。でもこれは、指をくわえて待っていたらだめです。自分たちでどういう活動をやって、どういうことを目指すのか、それこそコミュニティ形成のために何を使うのか考えてやったらよろしいかなと思います。我々のところも緊急雇用対策で15年前から、約3年間、6名のスタッフが来てくれていました。これはあくまで自立支援ですので、自立せなあかんです。お金がなくなりスタッフが来なくなったからといって、そこで「はいお終い」ではだめなんです。その3年間で自立できるように仕組んでおかないといけないですね。幸い我々のところは、1人のスタッフ雇用へと移行できましたので、まさしく自立できたと思っています。

宮本：ありがとうございます。飯塚さんや丹澤さんからは、行政からどのような支援やアドバイスを、どのようなタイミングで受けられたかという

のを教えていただけますか？

飯塚：非常に私たちは行政と仲が悪いです。できれば触ってくれるなという状態です。ほとんど私たちは自力でやっていくから手を出さないでくれというように自力でやっています。ただ、うらやましいなと思うのは、東松島市さんと、あおい地区協議会さんが非常に良好な関係でやっていらっしゃって、私も来られた時に見ていて羨ましいなと思いました。行政ができる限界があると思うので、限界以上は望まないというように割り切って活動しています。

丹澤：鹿折ですが、まちづくり協議会の活動では、距離があることは事実で、これまでも説明会で、行政の方が説明をし、住民が聞いて質問が2～3出てというフォーマルな関係がメインだったんですけれども、まちづくり協議会としては、もう少し気軽なコミュニケーションを図りたいと思っていて、提言書もしました。そういったことがきっかけになったのかはわかりませんが、市の職員の方が、あまり肩肘はらない感じで構成員会合に出てくれたり、毎週来てくれるようになってきました。あんまり堅い感じで行政の方が来ると、警戒してしまいますので、警戒されないような雰囲気構成員会合をやって、気軽なコミュニケーションを図ろうとしています。

コミュニティ形成につながった復興盆踊り大会については、後援を市にいただいただけで、予算も宮城県のものを使わせていただきましたし、宮城県の方がむしろ、コミュニティ形成への気遣いを持っていると感じます。ただ、市の方でも自治会づくりのステップはきちんとやられていると思います。

宮本：本多さんからは、行政には過度の期待をせずに自分たちがやれることを進めていくというお

話がありましたが、みなさんもそのような気持ちで活動されているようでした。そして使えるメニューは上手に使っていくということかと思います。

○震災から5年目以降の心のケア

宮本：そろそろ時間が近づいてきたんですけれども、心のケアについてもいくつか、ご質問ありましたのでお聞きしてみたいと思います。「仙台のマンション型復興団地では、引きこもりの方も多かったと思いますが、その方々のケアはどうされましたか？」。同じく飯塚さんに「5年経過してより専門性の高い支援が必要ということでしたが、看護師などの専門家に求めることは何ですか？心のケアだけですか？ほかに何かあったら教えてください」。

飯塚：私がお話しさせていただいたのは、看護師さんに特化したわけではないんです。今被災者が抱えている悩みというのが、段々段々人間の心の下の方に沈んできていて、複雑に絡まっている状況が非常に多いんですね。これをふりほどくには、ただ単に傾聴ができる人では解決ができなくて、カウンセリングができるような人、臨床心理士とか、そういうスキルを持った方たちが対応する必要が顕著にみられます。看護師さんにこだわっている訳ではありません。あとは神戸市さんはLSAをおかれています。仙台市の公営住宅にはLSAの配置はいっさいありません。これからも、仙台市では考えていないようです。仙台市がやらないのであれば、自分たちでやる、ということを見ると、自分たちで看護師さんの団体にちょっとブレゼンに行ってきたということですよ。

宮本：ありがとうございます。質問ではなくてお伝えしたいことということで来ていますが「災害公営住宅で孤独死が発見された。それまで宮城県

では孤独死が出ていない。孤独死という概念がないのです」。これから取り組んでいく必要がある、息の長い課題かと思えます。

○神戸市での換地減歩の施策について

宮本：最後に技術的な質問を河合さんにしたいと思います。換地減歩について、区画整理の話だと思えます。「減歩 9%が 4%位で収まった、お金で解決したとのことですが、買い上げた土地を土地減少者が購入したと思うが、売却した土地所有者は存在したのでしょうか。地域外に転出した所有者でしょうか」。

河合：いろいろです。神戸市は積極的に土地を買ったんですね。土地を売られた方というのは、当然住まれないんですが、売った方には災害公営住宅の入居資格を与えたんですね。それはそれでよかったのかなと思います。逆に土地がなかったら土地区画整備事業は回っていなかったんじゃないかと思えます。普通、区画整理の減歩は2～3割が当たり前ですからね。ただ災害ということで、我々の地区は協議しながら上限を 9%と決めました。それでもやはり土地が狭いもので、ある程度大きい敷地のところは 9%取られています。でも、傾斜減歩など、広さによって減歩率が変わってきます。

宮本：ありがとうございます。

○議論のふりかえり

宮本：今日のパネルディスカッションの中身を事務局の方が、こちらにまとめてくださっていますので、簡単におさらいをしようと思えます。今日はコミュニティづくりのプロセスというところから入って、種まきや、それが芽を出して育っていく、そういったところをどういう風に進めてきた

かというのをあすと長町や、鹿折の事例についてお話をいただきました。また、担い手育成や組織の体制づくりについてですね。神戸でもまちづくり協議会とは別にふるさとネットという新たな枠組みを作ってそこで活動を続けてきたというお話などを河合さんからは頂きました。

事務局の役割では、組織のスタイルとして、優秀な事務局員を中心に物事を推進していくというタイプ、素朴に、地元の人たちの合意でゆっくりと進めていく、そういういろんなスタイルがあるというお話がありました。

それから、拠点の重要性について、事務局があることで、そこに人が立ち寄って気軽に話し合いやコミュニケーションをとる環境が生まれること、行政との連携、心のケアなど、いろいろとみなさんのご協力もあって、多様な話題をカバーできたかと思えます。

○参加者へのメッセージ

宮本：最後に、登壇者の方々より一言ずつ、今日参加されているみなさんへメッセージをお願いいたします。

本多：今日はお三方のお話に大変勉強させていただき、どうもありがとうございました。つくづく思いますが、数年前こうした場に飯塚さんがでていかれると歳が一番上と見えましたが、今は飯塚さんが若い方という感じがすごいです、世代構成が変わってきているというのを思います。公営住宅の高齢化が進むということはよく言われますが、高齢化と一言で扱うということは私はあまり好きではないんです。やっぱり元気の良いお年寄の方とかいますから、できるだけそういう人たちの力を扱いながらやっていくというのが大事だと思います。飯塚さんたちはまだまだこれからも活躍されるであろうと思います。こちらにいらっしゃ

る会場のみなさまにもぜひこれから、いろいろやっていかれてほしいと思います。

河合：本日はありがとうございます。まだみなさんも道半ばの状態ですが、我々も疲弊してきました。でももう20年経つと、普通にできてくるんですね。大体10年くるまでが大変ですね。みなさんへは、お疲れ出ませんように、という言葉をかけておきます。ありがとうございました。

飯塚：今日はありがとうございました。ハードの復興は目に見える形で進んできていますが、心の復興、人間の復興というところに向けて、私たちは本当にシビアなところに取り組んでいかなければならないと思います。そのためにつながりデザインセンターという法人を立ち上げてこれからやっていきます。ぜひともみなさんと情報共有しながらやっていきたいと思いますので、何かありましたら、お声がけいただければと思います。今日はありがとうございました。

丹澤：今中学生と一緒に、まちづくり事業に関わっていますが、中学生や小学生の子供たちに、地元の人からメッセージを届けるということが、とても効果があるんだなと思っています。自治会の集まりに、子どもの時から連れて来ていると、大人になってからも来てくれると地域の住民さんが話していたのを思い出しました。

コミュニティ形成というと、一つの解決策はなく、本当に地道な活動をやってきて、今回報告しました盆踊り大会もできたと思っています。地道さが重要だと思います。今日は本当にどうもありがとうございました。

宮本：どうもありがとうございます。これで、第2部パネルディスカッションを終了したいと思います。

す。本日参加されたみなさんが各地でされている活動に、何かしらお持ち帰りいただけるヒントがあれば嬉しいです。登壇者の皆様、どうもありがとうございました。(終)